

上野原町埋蔵文化財調査報告書 第7集

野田尻I遺跡

民間宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998. 3

上野原町教育委員会

野田尻I遺跡

民間宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998. 3

上野原町教育委員会

序

近年、全国各地で大型土木事業の施工に伴い、わが国の歴史、とりわけ縄文文化の学説を根底から覆すような、考古学的な大発見が続いている。青森県三内丸山遺跡はその典型である。時代は異なるが吉野ヶ里にしても同様である。

規模の差はあれ上野原町においても開発事業に伴う遺跡の発見は多く、発掘に携わる人々の多忙さは、「席の温まるいとま」もなく「猫の手も借りたい」思いである。

野田尻Ⅰ遺跡の発掘は土地所有者富田藤雄氏の、住宅建設による発掘依頼に端を発した。この付近一帯の遺跡は古くから耕作地表面に土器の破片が散見されていたことから「野田尻Ⅰ遺跡」と命名されていた。遺跡の分布状況をみると仲間川を南北に挟んで、現在の集落の下に殆ど形を同じくして存在することにまず驚く。数千年の時空を経ても、人々が生を営む場所は自然の掟に従順に従っていることが理解できる。

発掘された二基の竪穴住居跡の端正で整然とした美しさ、丹精込めて掘った雰囲気の伝わってくる丸い柱穴、その中央に据えられた土器を閉む敷石配列は、庭園の配石を偲ばせるものを感じた。人にとって家の建築は「最高の悦楽」だそうだが、縄文時代の人もそんな思いの中でこの住居の「建て前」を祝い、完成時の喜びと感動、厳謹な気分に浸ったであろうことは想像に難くない。

終わりにあたり、ご協力とご理解いただいた富田様、発掘に参加くださいました関係者のご労苦にお礼申し上げ、序といたします。

1998. 3

上野原町教育委員会

教育長 遠藤 諸三

例 言

- 1 本書は、山梨県北都留郡上野原町野田尻地内野田尻 I 遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は宅地造成に伴う事前調査で、宮田藤雄氏の委託を受けて実施された。
- 3 発掘調査は上野原町教育委員会が実施した。その組織はつぎのとおりである。

事務局 教育長 遠藤謙三

社会教育課長 久島 啓（平成 8 年 9 月まで）・水越辰巳（平成 8 年 10 月から）

社会教育課長補佐 高橋武久（平成 8 年 10 月から）

社会教育係長 片伊木卓男（平成 8 年 9 月まで）

担当者 社会教育係主事 小西直樹

参加者 会津 一・長田貞夫・片伊木まち子・片伊木由香・加藤文宣・杉本征男・杉本富子・太葉田孝一
・富田 寛・富山敬子

- 4 本報告書の執筆・編集は、小西直樹が行った。
- 5 発掘調査から本書の作成を通して多くの方々のご指導・ご助言をいただいた。とくに、石器付着の赤色物質について帝京大学山梨文化財研究所保存科学研究室鈴木稔氏に、また、石器石材については都留文科大学講師中井均氏に、それぞれご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。
- 6 本報告書にかかる出土品、記録図面等は一括して上野原町教育委員会が保管している。

凡 例

- 1 遺構の縮尺はつぎのとおりである。
住居址 1 / 60、炉址 1 / 30
- 2 遺物の縮尺はつぎのとおりである。
土器破片・石器 1 / 3、小型石器 2 / 3、大型土器 1 / 4、土製円盤 1 / 2
- 3 遺構図の水系高は海拔高を示す。
- 4 遺構図中、小穴内の数値は床面からの深さ (cm) を示す。

目 次

序

例言

凡例

第Ⅰ章 調査にいたる経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と周辺の環境	1
第Ⅲ章 調査の方法と経過	1
第Ⅳ章 遺跡の層序	1
第Ⅴ章 調査の成果	4
第Ⅵ章 まとめ	18

挿図目次

第1図 遺跡の位置	2
第2図 周辺の遺跡分布図	3
第3図 全体図	3
第4図 層序模式図	3
第5図 1号住居址	5
第6図 1号住居址出土土器	6
第7図 1号住居址出土土器	7
第8図 1号住居址出土土器	8
第9図 1号住居址出土土器・土製品	9
第10図 1号住居址出土石器	10
第11図 1号住居址出土石器	11
第12図 2号住居址	13
第13図 2号住居址出土土器	14
第14図 2号住居址出土土器	15
第15図 2号住居址出土石器	16

表目次

第1表 石器観察表	17
-----------	----

図版目次

図版1 調査地遠景・調査地近景	図版2 調査風景・調査区全景
図版3 1号住居址	図版4 2号住居址
図版5 遺物出土状況	図版6～7 住居址出土遺物

第Ⅰ章 調査に至る経緯

平成6年(1994)8月31日 富田藤雄氏より、文化庁宛に工事届が提出される。

平成6年(1994)9月12日 上野原町教育委員会より、文化庁宛に発掘調査の通知を提出する。

平成6年(1994)9月19日～10月1日 試掘調査を実施する。

平成7年(1995)6月5日～6月25日 本調査を実施する。

第Ⅱ章 遺跡の位置と周辺の環境

野田尻I遺跡は、山梨県北都留郡上野原町野田尻に位置する。上野原町は山梨県最東端に位置し、東京都檜原村・神奈川県藤野町と接している。町の面積の80%近くが山林で占められ、桂川(相模川)が東流する。

野田尻I遺跡は、桂川支流の鶴川から派生した仲間川右岸の河岸段丘面に位置し、今回の調査地は、この段丘面の西端に当たる。調査地西側は犬鳴神社を挟んで急傾斜の谷が、北側は仲間川に臨む標高差約50mの崖となる。南側は旧甲州街道の野田尻宿、および中央自動車道を挟んで標高400m前後の丘陵地に続く。

仲間川流域には河岸段丘が顕著に発達している。右岸には中流から鶴川の合流点まで高さ約100mの侵食崖が形成され、中位～高位段丘が発達し、一方、左岸には低位～中位段丘の発達が見られる。

周辺の遺跡の大半は、こうした段丘面に分布している。仲間川右岸では、本遺跡と西側の谷を隔てて野田尻II遺跡(2)があり、南側の丘陵斜面地に位置する大野窟遺跡(3)では縄文時代の陥し穴土坑や、古代の円形土坑群が発掘された。下流約2kmの大浜跡(4)・南大浜跡(5)・大沢I跡(6)・大沢II跡(7)では大規模な発掘調査が行われており、これまでに縄文時代中期の堅穴住居址や敷石住居址の他、縄文・平安時代の遺物・遺構が多数確認されている。仲間川左岸には、縄文時代の遺跡が連なっている。大倉遺跡(8)では縄文時代中期末葉の敷石住居1軒、堅穴住居1軒、平呂遺跡(9)で縄文時代中期中葉の堅穴住居1軒が発掘調査されている。また、大曾根遺跡(10)の試掘調査で縄文時代中期の住居が数軒確認されている。

このように本遺跡周辺では縄文時代中期の集落が多く確認されており、本遺跡との関連が注目される。

参考文献『上野原町誌(上)』1975 長谷川孟他『牧野遺跡・大倉遺跡・大澤I遺跡』上野原町教育委員会1980

大野窟遺跡発掘調査団『大野窟遺跡』上野原町教育委員会1992 宮沢公雄『大門遺跡群』『山梨考古第50号』山梨県考古学協会1994

第Ⅲ章 調査の方法と経過

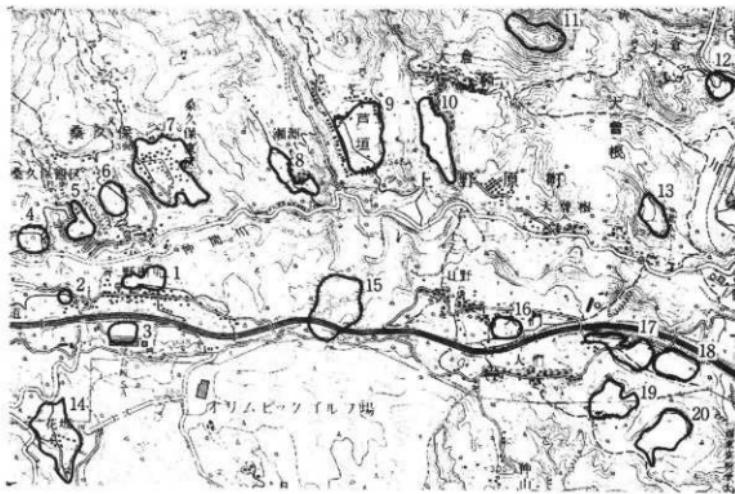
工事予定区域約1,500m²に2m四方の試掘坑を12個設定・調査したところ、縄文土器を多量に含む黒色円形プランを確認した。このため、プラン確認範囲を中心に約200m²を本調査区とし、重機で表土を掘削した後、遺構の確認・検出を行った。

第Ⅳ章 遺跡の層序(第4図)

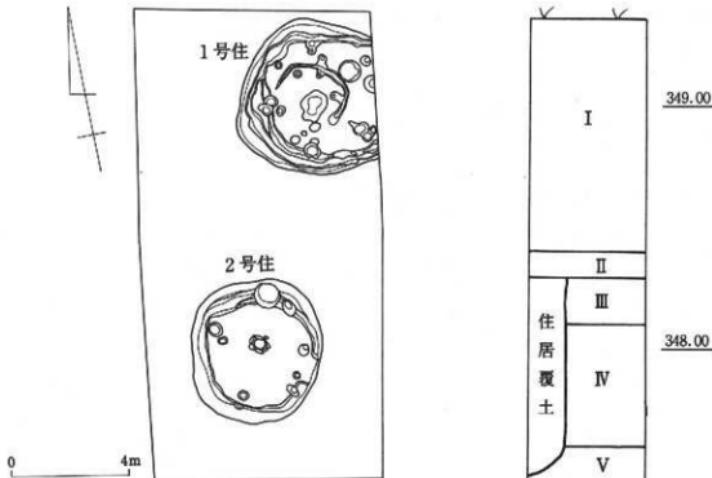
第Ⅰ層 暗褐色土 表土層 締まり・粘性弱い。 第Ⅱ層 黒褐色土 締まり・粘性ややあり。橙色スコリア・黒色スコリアを多量に含む。 第Ⅲ層 暗褐色土 締まり・粘性やや強い。上層の黒褐色土、下層のソフトロームが斑状に混じる。本層中で縄文時代の住居を確認した。 第Ⅳ層 褐色土 ソフトローム層。 第Ⅴ層 橙褐色土 ハードローム層。



第1図 遺跡の位置



1 野田尻 I 遺跡	2 野田尻 II 遺跡	3 大野窪遺跡	4 西不老遺跡	5 中風呂遺跡
6 古屋戸遺跡	7 平呂遺跡	8 潤淵遺跡	9 芦垣遺跡	10 大倉遺跡
11 大倉要害砦	12 小倉遺跡	13 大曾根遺跡	14 花板遺跡	15 長峯砦
16 日野富士塚遺跡	17 南大浜遺跡	18 大浜遺跡	19 大門 I 遺跡	20 大門 II 遺跡



第3図 全体図 (1/600)

第4図 層序模式図

第V章 調査の成果

調査の結果、縄文時代中期の竪穴住居址 2軒が 4m 離れて発掘された。

1号住居址（第5図～11図、図版3、5、6）

位 置 調査区北側に位置する。

形状・規模 住居東端が未調査区にかかる。平面の直径約5.2mで、ほぼ円形を呈するものと思われる。

床面・壁面 床面はローム層中に掘り込まれ、ほぼ平坦である。壁高は約70cmある。

炉 住居中央に位置する。炉は重複し、新旧2基に分けられる。新炉の壠方は直径80cmのほぼ円形を呈し、最深部の深さは26cmある。周縁に10cm～30cm程度の石を円形に配置している。炉底面に焼土、灰層が堆積する。旧炉の壠方は、直径約55cmの不整円形を呈し、最深部の深さは32cmある。覆土上面に新炉の炉石が配されていた。底面に焼土粒・炭粒が多く含む層が薄く堆積していた。

付属施設 周溝3本、ピット21基が検出され、新旧2基の炉と併せて、住居拡張・建て替えが複数回行われたことが想定できる。本稿では、炉と各周溝・ピットにつきのような対応関係があるものとして説明する。

新炉に対応する施設 周溝は實際を全周する1本、および、その内側、住居西側から南側にかけての1本がある。柱穴はP1、P4、P7～P13が考えられる。直径50cm～60cm、深さ44cm～78cmである。このうち主柱穴は6本と推定される。なお、周溝に沿って柱穴が重複しており（P8とP9およびP11～P13）、住居南側へ拡張されたことが推定される。

旧炉に対応する施設 周溝は住居中央部、炉の北側から東側にかけての1本がある。柱穴はP14～P17が考えられる。いずれも直径25cm～35cm、深さ41cm～65cmであり、4本程度の主柱穴と推定される。

出土遺物 大半は覆土中の出土である。床面遺物は、炉の東側1mに大型の扁平縹（65cm×40cm、厚さ13cm）が置かれ、その脇に浅鉢片（第9図48）、円縹（10cm×8cm）、赤色付着物をもつ磨石（第11図23）がある。

土器（第6図～9図）

1～20は条線が地文である。1・2は深鉢口縁部で、重弧文（1）斜行文（2）。3～16・19・20は条線地に粘土紐状の隆帯が付く。15・16・19・20の隆帯には刻み。17・18は条線地に半裁竹管による刻み。

21は渦巻状の隆帯をもつ把手。22は隆帯が口縁部で縱、頸部で横に付く。頸部の隆帯間に刻み。23は隆帯が口縁部で横、さらに下で縱に付く。24は頸部に刻みを持つ隆帯。

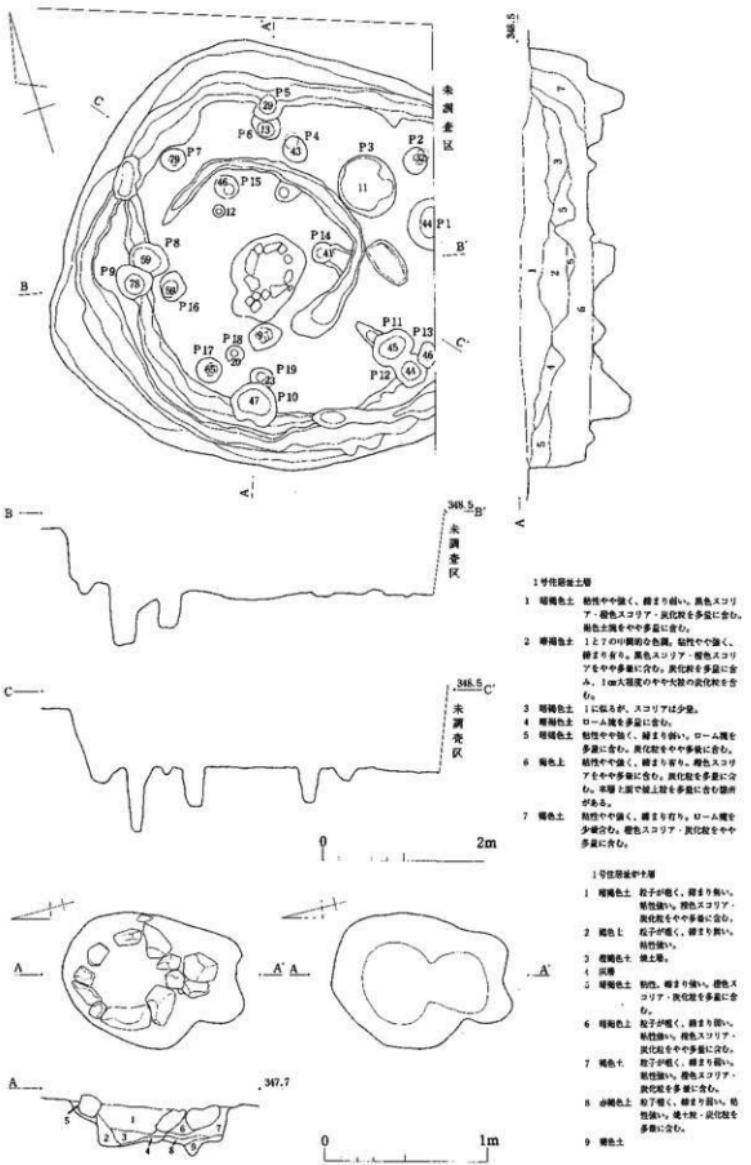
25～33は縄文が地文である。25は口縁部に大きく蛇行する隆帯が付く。26～29は胴部に粘土紐状の波状隆帯が付く。30は無文地の口縁部に刺突文、さらに下に沈線文。31・32は内溝のある口縁部に渦巻状隆帯が付く。33は半裁竹管による沈線文で、頸部では横、胴部では縱、およびU字状に施される。

34～36は口縁部に半裁竹管による弧状沈線文が施される。34は刺突文、36は縄文地。37・38は燃糸文が地文で、半裁竹管による沈線文が施される。39・40は深鉢型土器の無文口縁部である。41・42は細かな条線が地文となる深鉢型土器で、41の胴部に半裁竹管による沈線文が縦にはいる。42の口縁部には弧状の半隆帯が巡る。43～45は深鉢型土器の底部である。43は縄文、44は無文、45の底面には木葉痕。

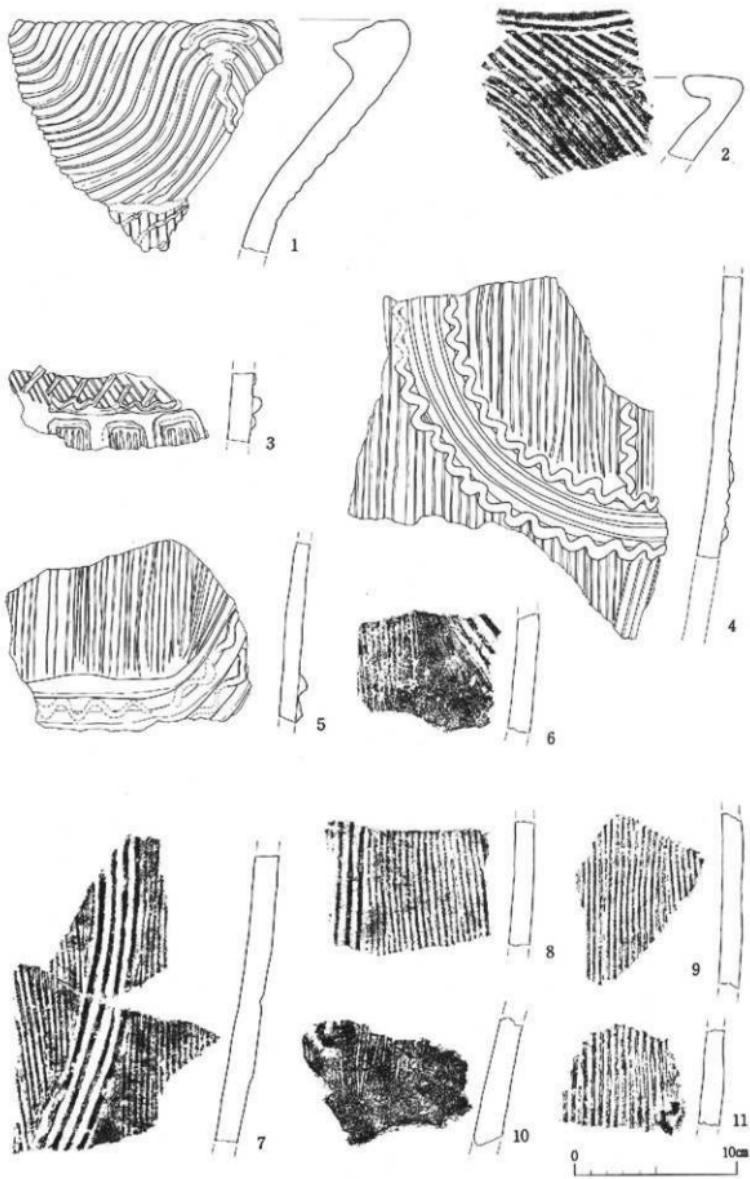
46～50は浅鉢型土器である。46～48は無文。49・50は方形区画の沈線文。49の内面屈曲部に赤彩が残る。

51は有孔鍔付土器。

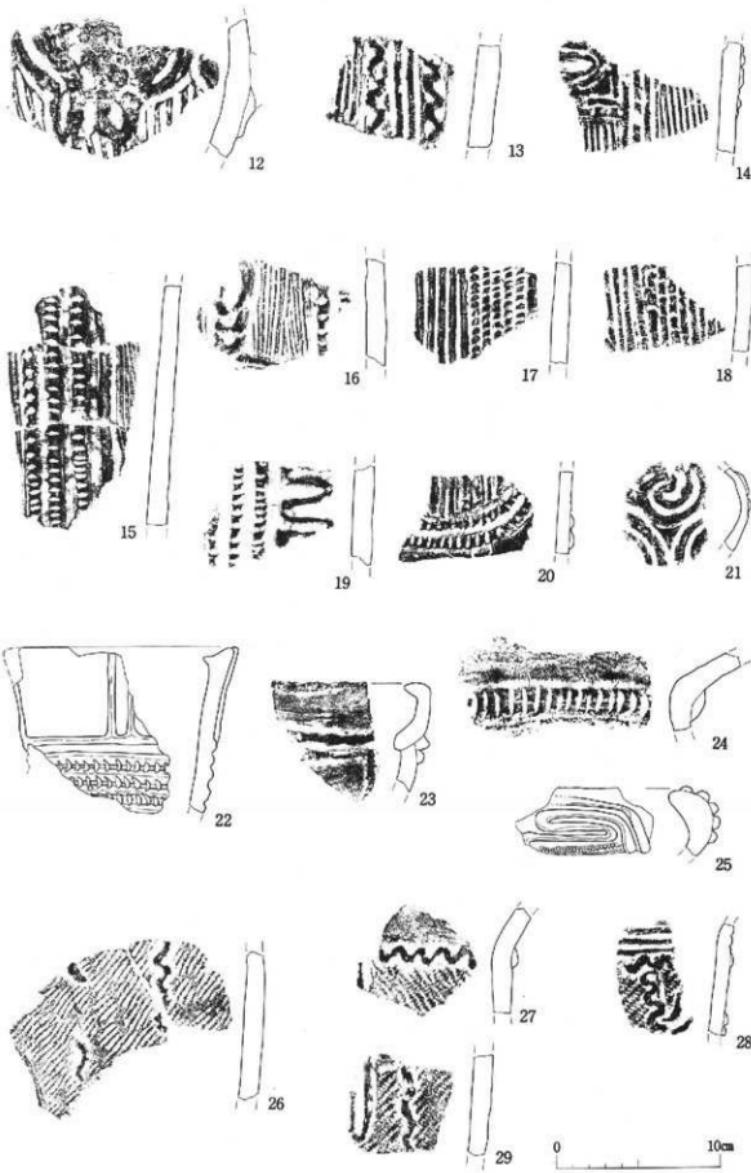
52～58は厚みのある隆帯が特徴的な深鉢型土器である。52は口縁部に沈線による三叉文を伴う。53・55は蛇頭状の把手、54は渦巻状の隆帯、56は刻みを持つ隆帯をもつ。57・58は扁平な隆帯が弧状に配される。



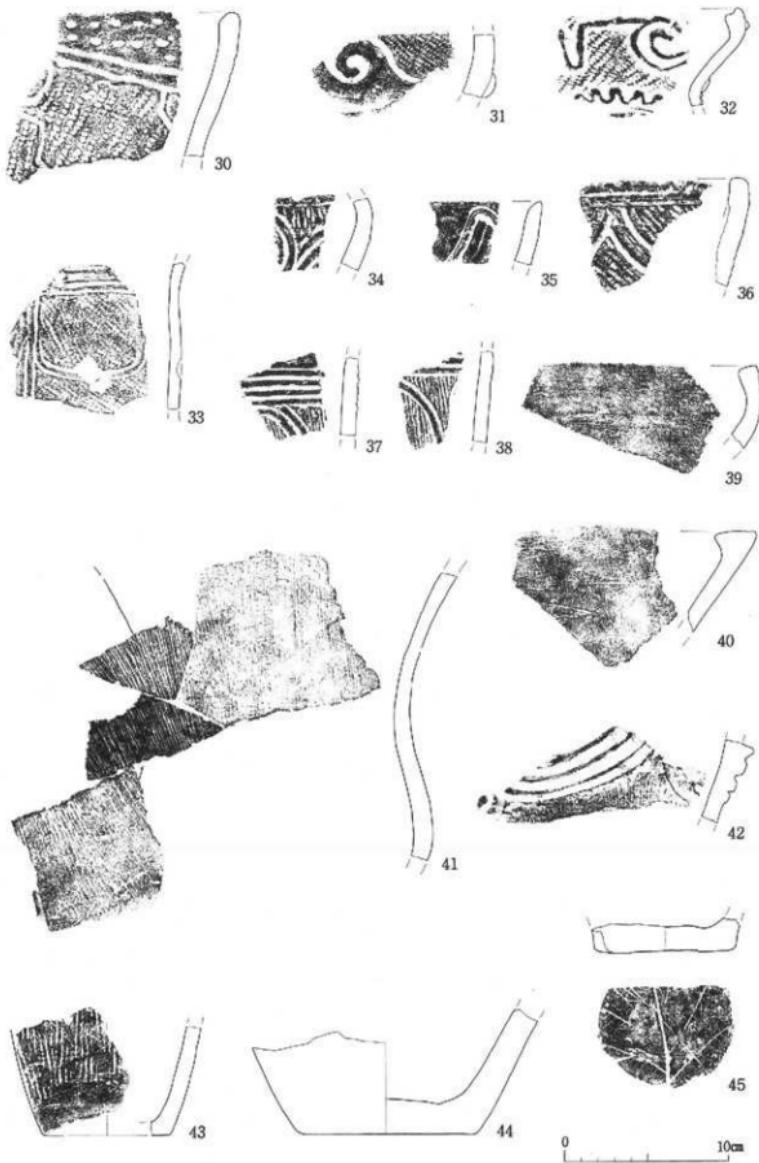
第5図 1号住居址



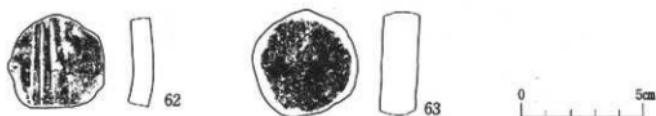
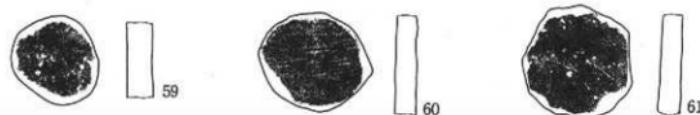
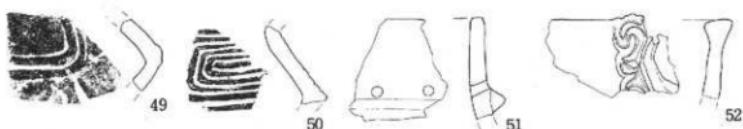
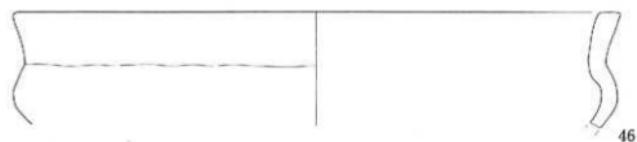
第6図 1号住居址出土土器



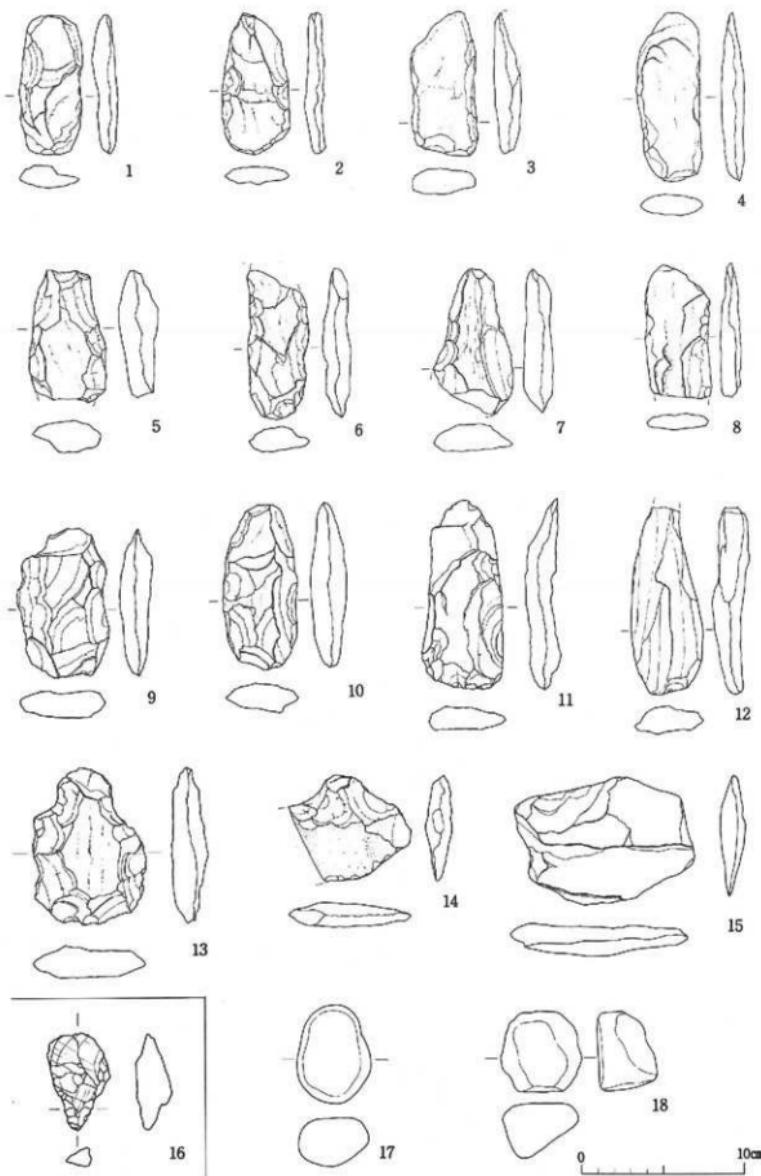
第7図 1号住居址出土土器



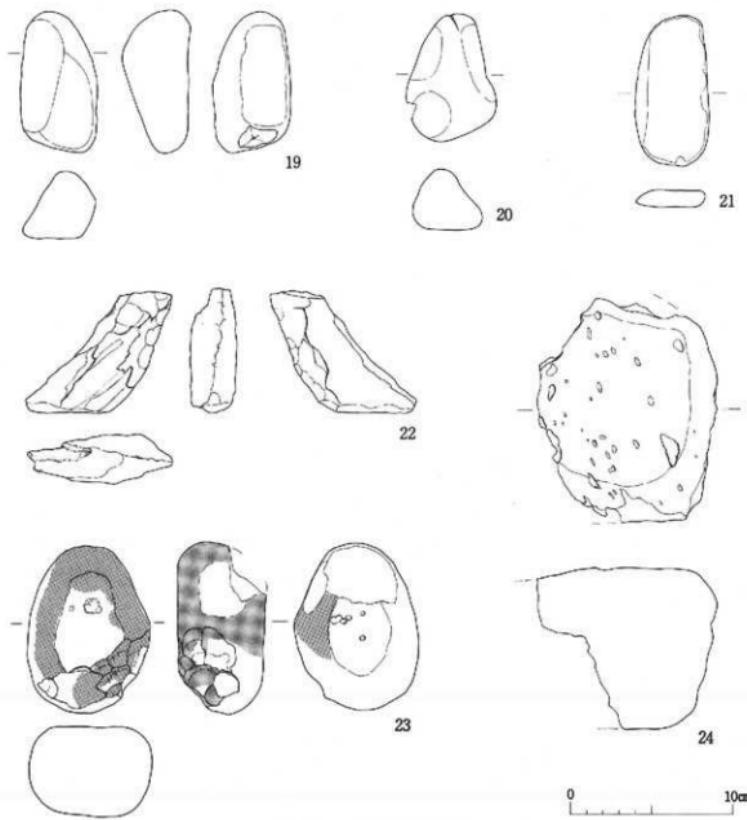
第8図 1号住居址出土土器



第9圖 1號住居址出土土器・土製品



第10図 1号住居址出土石器



第11図 1号住居址出土石器

土製円盤（第9図）

5点出土した。周縁が丸く磨滅したもの2点（59, 63）、打ち欠きの状態で角を持つもの3点（60～62）であった。59～61, 63は無文、62は条線地に波状の粘土紐が付く。

石器（第10図、11図）

1～13は打製石斧である。形態はいわゆる短冊形が大半である。13は基部がつまみ状に加工される。14は石匙と思われる。片面に自然面が残る。刃部は外湾する。15は横刃型石器と思われる。粗い階段状剥離によって作り出された鋭い縁辺を刃部とし、裏面は自然面が残る。16は石錐である。

17～23は磨石である。22は棒状素材の端部に平滑な磨面をもつ。23は表裏・側面に平坦な磨面がある他、端部には敲打によるものと思われる剥離痕がある。なお、赤色付着物が磨面の縁辺、および端部の剥離痕に見られる（実測図中のスクリーントーン）。24は石皿の破片で、一面に平坦な磨面をもつ。

2号住居址（第12図～15図、図版4、5、7）

位 置 調査区南側に位置する。

形状・規模 長径5.0m×短径4.5mの、ほぼ円形を呈する。

床面・壁 床面はローム層中に掘り込まれ、ほぼ平坦である。壁高は約60cmある。

炉 住居中央に位置する。炉は石囲い埋臺炉である。長径1.0m×短径0.8mの壠方をもつ。9個の60cm～70cmの横長の石を六角形に配置している。このうち南北対になる石は、斜めにささって埋臺を固定している（炉址断面図参照）。埋臺は胴中位以下が欠かれ、正位に埋設されている。口縁部の直径33.0cm、高さ17.5cmである。焼土層、灰層の堆積は無い。

付 屬 施 設 周溝は一本めぐるが、住居南東部のP3とP4の間で途切れる。周溝の幅は20cm～30cmで、住居北側では45cmにふくらむ。周溝の深さは10cm～40cmである。

ピットは9個検出された。このうち主柱穴は、P1～P5の5本と推定される。いずれも直径40cm～50cm、深さは58cm～78cmを計る。また、各主柱穴に近接してP7～P9がある。いずれも直径25cm～30cm、深さは17cm～51cmを計る。この他、住居北壁の直下に、周溝を切ってP6がある。長径92cm×短径80cm、深さ83cmを計り、壁はほぼ垂直である。覆土は、全般に縦まりに乏しく、上層が暗褐色土、下層は3cm以下の硬質ローム塊を多く含む褐色土で構成されている。

出 土 遺 物 大半は覆土中の出土で、とくに壁際に多い。なお、第3層上面の北壁寄りで焼土塊を含む焼土層の集中部が1個所見られた。

土器（第13図、14図）

1は炉に用いられた深鉢型土器である。口縁部は無文、胴部は縦の条線が地文であり、刻みを部分的に持つ隆帯が頸部以下に付く。頸部の隆帯は3本からなり、それぞれ交互に連結する。口縁部の直径33.0cm、現存高は17.5cmである。

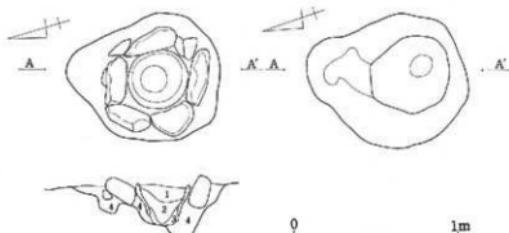
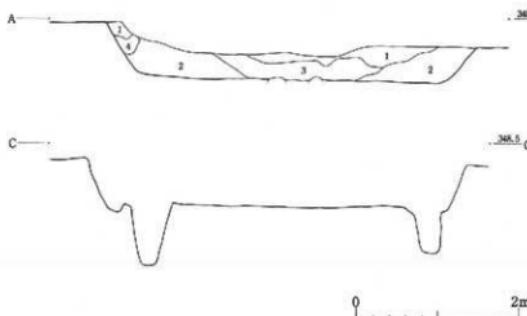
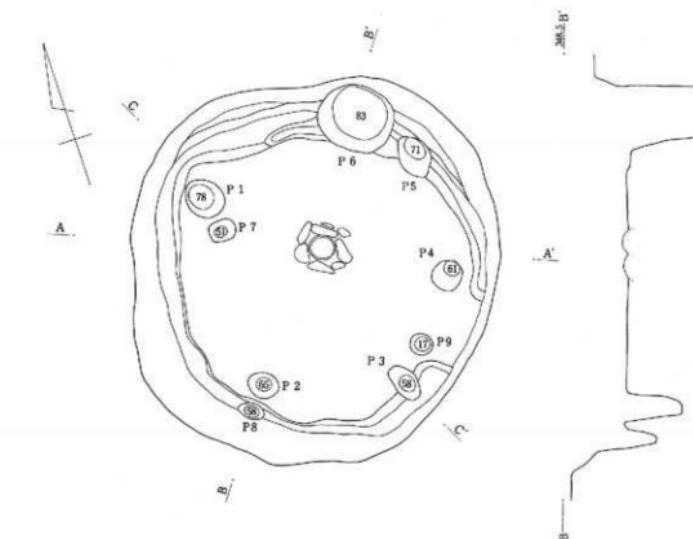
2は深鉢型土器。口縁部は無文で、口縁端部に2本の隆帯が巡る。頸部に2本の半隆帯、胴部は底部を除き燃糸文が施される。なお、胴下半部に長径3.8cm×短径2.8cmの楕円形の穿孔1個がある。口縁部の直径17.4cm、高さ18.5cmである。

3は浅鉢型土器。口縁部から胴部にかけて1/4が残存する。口縁部から胴上半部の外面に赤彩が認められる。口縁部の推定直径38cm、現存高は14.3cmである。

4～12は条線が地文で、11を除き隆帯が付く。13～17は縄文が地文で、粘土紐状の波状隆帯が付く。18・19は把手で、19にはx字状の隆帯が付く。20は口縁部に沈線による渦巻文をもち、その一端は垂下する。地文は斜の条線。21・26は浅鉢型土器である。21は隆帯による渦巻文、26は胴部上半部に沈線による方形区画文。22は縄文地に波状沈線文が垂下する。23は丸く膨らむ胴部に縄文が施される。24は縄文地で、頸部および胴部に半截竹管による沈線文。25は口縁部の弧状沈線による区画を刺突文で埋める。27は有孔鋤付土器で、内外面に赤彩が認められる。28・29は深鉢型土器の口縁部で、29の口縁上端に2本の沈線が巡る。30は刻みの付く隆帯が、横および円弧に配される。

石器（第15図）

1～7は、打製石斧で、形態は「短冊型」と呼ばれるものである。8～10は磨石である。8、9は球形を基調とした小型で、明瞭な磨面は見られない。11は叩き石。細長い素材の一端に敲打によるものと思われる剥離痕が見られる。12は石皿の破片である。



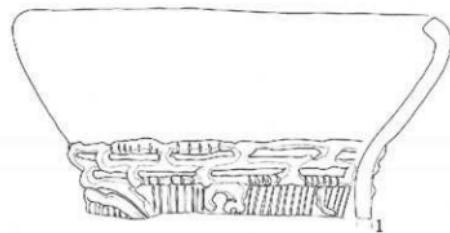
第12図 2号住居址

2号住居址土壤

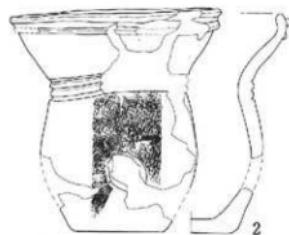
- 1 緩衝色土 粘性やや強く、緻まり弱い。褐色スカリヤを多量。褐色スカリヤを多く含む。炭化粒をやや多量に含む。
- 2 黄褐色土 粘性やや強く、緻まり弱い。褐色スカリヤをやや多量含む。褐色スカリヤを多く含む。炭化粒をやや多量に含む。
- 3 黄褐色土 粘性やや強く、緻まり弱い。褐色スカリヤをやや多量。褐色スカリヤを多く含む。1cm大粒度のやや大粒の炭化粒を含む。
- 4 明褐色土 粘性やや強く、緻まり弱い。ローム粒を多量に含む。

2号住居址土壤

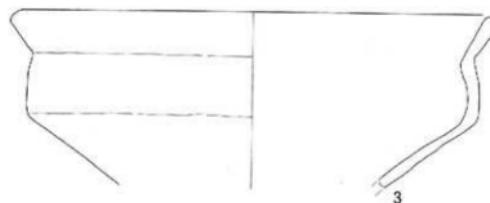
- 1 緩衝色土 粘性強く、緻まり弱い。褐色スカリヤ・炭化粒・鐵土粒を少量含む。
- 2 黄褐色土 中やや褐色を帯びる。粘性強く、緻まり弱い。褐色粒・鐵土粒をやや多量に含む。
- 3 緩衝色土 粘子が粗く、緻まり弱い。
- 4 喜海色土 粘子が粗く、粘性・緻まり弱い。ローム粒・炭化粒・鐵土粒を多量に含む。



1



2



3

0 10cm



4



5



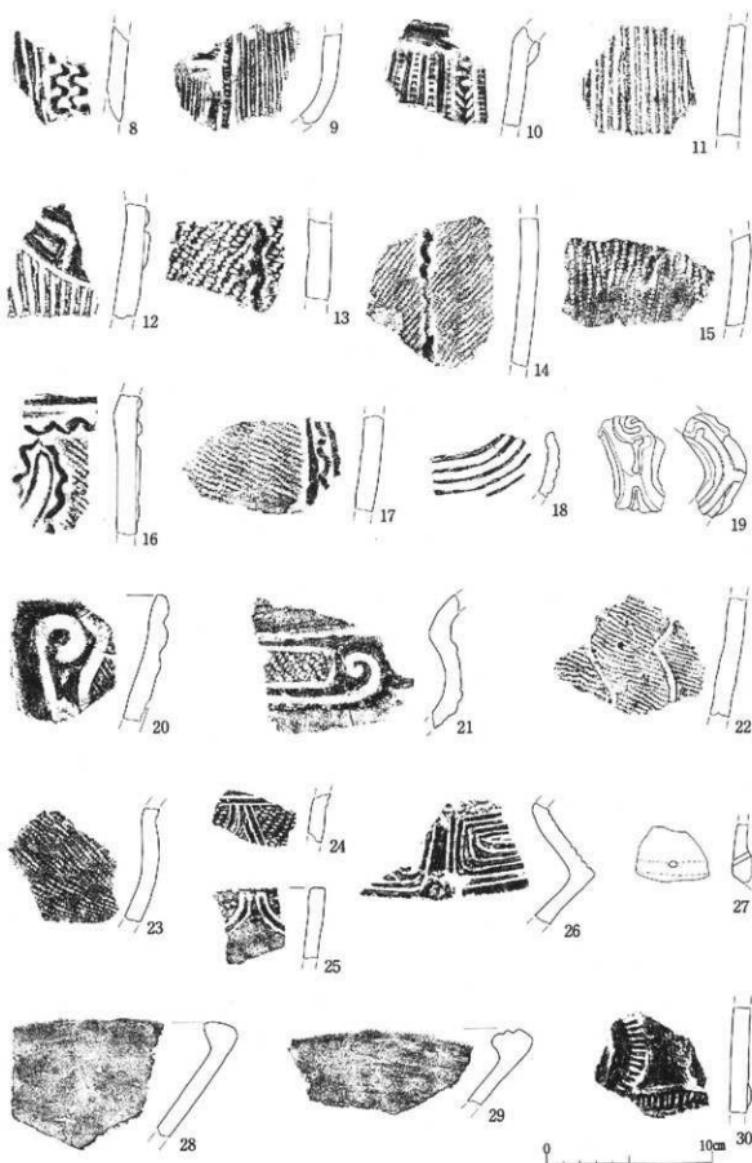
6



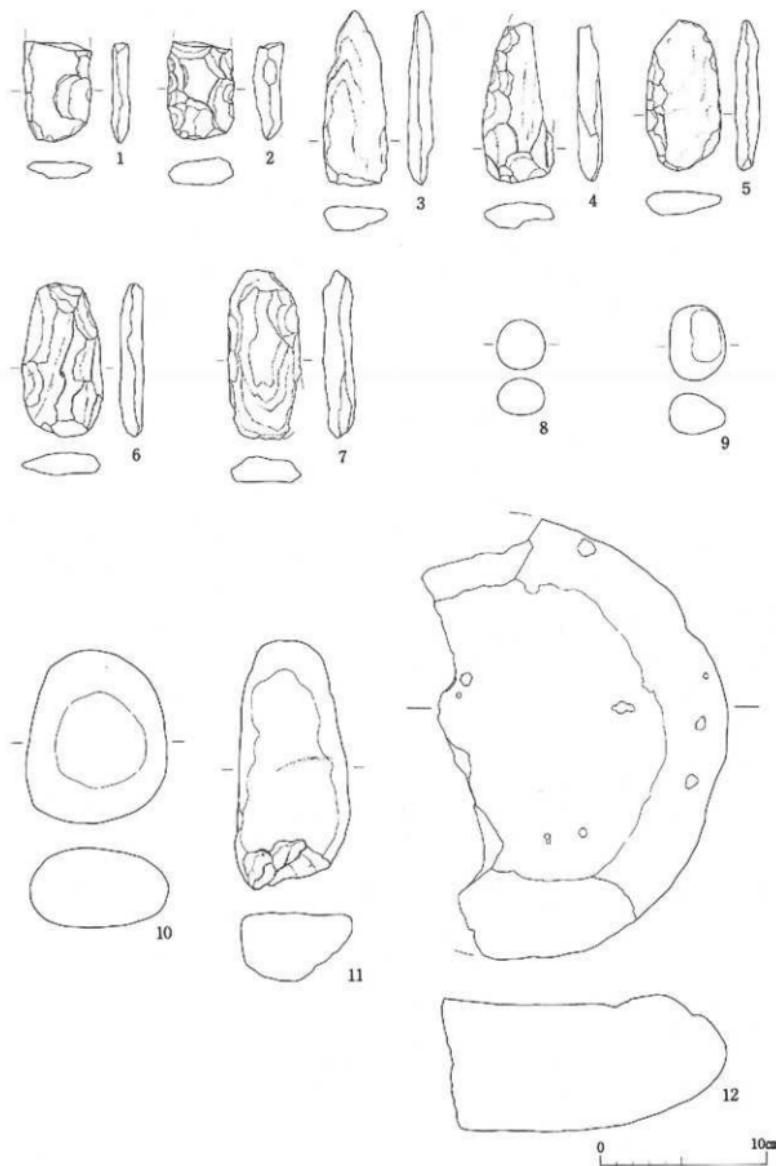
7

0 10cm

第13圖 2號住居址出土土器



第14図 2号住居址出土土器



第15圖 2號住居址出土石器

出 土 地	番号	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	備 考
1号住居址	1	打製石斧	8,7	3,7	1,4	60	珪質泥岩	
タ	2	タ	8,8	4,0	1,0	50	凝灰質砂岩	
タ	3	タ	8,9	4,0	1,6	70	珪質泥岩	
タ	4	タ	10,5	3,9	1,4	80	珪質泥岩	
タ	5	タ	(8,2)	4,9	2,3	110	含礫泥岩	
タ	6	タ	(9,3)	3,6	1,4	60	珪質泥岩	
タ	7	タ	(9,0)	4,9	1,6	80	珪質泥岩	
タ	8	タ	(8,5)	3,9	1,0	40	泥岩	
タ	9	タ	(9,2)	5,2	1,4	100	泥岩	
タ	10	タ	9,9	4,1	2,0	110	泥岩	
タ	11	タ	11,8	5,0	1,5	110	珪質泥岩	
タ	12	タ	(11,4)	4,2	1,7	100	泥岩	
タ	13	タ	9,9	7,0	1,8	120	泥岩	
タ	14	石 錐	6,5	(7,5)	1,5	65	細粒砂岩	
タ	15	横刃型石器	7,8	11,0	1,6	121	泥質細粒砂岩	
タ	16	石 錐	2,9	1,8	1,0	0,2	黒曜石	
タ	17	磨 石	6,0	4,2	3,1	90	細粒砂岩	一部吸炭
タ	18	タ	5,0	4,3	3,5	100	粗粒砂岩	
タ	19	タ	8,8	4,7	3,9	195	細粒岩～細粒砂岩	
タ	20	タ	7,9	5,5	3,8	180	ホルンフェルス(細粒砂岩)	一部吸炭
タ	21	タ	9,4	4,5	0,8	55	粘板岩	
タ	22	タ	11,4	4,0	2,5	135	泥質ホルンフェルス	
タ	23	タ	10,7	7,6	5,5	590	細粒混じり粗粒砂岩	赤色顔料付着
タ	24	石 皿	13,8	10,4	10,0	1345	玄武岩質溶岩	
2号住居址	1	打製石斧	6,0	4,0	1,0	40	泥岩	
タ	2	タ	4,0	4,0	1,6	60	泥質ホルンフェルス	
タ	3	タ	10,8	3,9	1,0	70	珪質泥岩	
タ	4	タ	9,8	4,2	1,5	80	凝灰質砂岩	
タ	5	タ	9,2	4,4	1,2	70	泥質ホルンフェルス	
タ	6	タ	9,4	4,9	1,5	90	泥岩	
タ	7	タ	10,5	4,3	1,6	90	泥岩	
タ	8	磨 石	4,5	3,3	2,7	60	粗粒砂岩	
タ	9	タ	3,1	2,6	2,1	20	細粒砂岩	
タ	10	タ	(15,0)	6,9	4,5	660	かんらん石玄武岩	
タ	11	叩き石	10,7	8,2	4,7	660	細粒岩	
タ	12	石 皿	(26,2)	17,6	8,3	5500	玄武岩質溶岩	

第1表 石器観察表

第VI章 まとめ

今回の発掘調査では縄文時代中期の堅穴住居2軒が検出された。本遺跡で行われた初めての発掘調査であり、この成果は、今後、周辺の調査において一つの指針になりえるものと言える。本遺跡の位置する仲間川流域は、第II章で述べたとおり、これまでにも縄文時代中期の住居が発掘されており、「縄文中期のメッカ」(註1)とまで呼ばれた地域である。今回の成果は、流域の河岸段丘面が縄文時代中期の居住スペースとして利用されていたことを改めて裏付けるものである。

今回の調査地点は現在確認されている遺跡範囲の西側にあたり、縄文中期の集落がどのような広がりを持つのか興味が持たれる。試掘調査では、2軒の住居の外に遺物・遺構が確認されていないため、住居は比較的散漫な分布をしていることが想定できるが、調査面積がわずかであるため不確定である。

出土遺物は全て住居中の出土であり、その大半は覆土に含まれていた。床面遺物は、1号住で扁平な大型礫と磨石、および浅鉢片、2号住は石開炉に用いられた深鉢だけである。土器は中期中葉から後葉に位置するが、主体は曾利I～II期に分類できることから、住居の時期もこの主体を占める時期に比定できる。石器は土器量に比べ少ない。石器の大半は在地小仏山系の石材で作られている。器種構成の主体を占めるのは打製石斧で、統いて磨石類が目立つ。

1号住の床面から出土した磨石（第11図23）には赤色付着物が認められたが、これは赤色顔料のうち、いわゆるベンガラである可能性が高い（註2）。この顔料は、平坦な磨面の周縁部、および叩きによって生じたと思われる端部の剥離痕に付着していることから、顔料を叩いたり、磨りつぶした行為が想定できる。なお、一緒に出土した扁平な大型礫の表面にはわずかに磨滅したような痕跡が認められるが、顔料の付着は認められない（註3）。このため、顔料付着の磨石とセットで用いられたことに言及するには不確定さは残る。しかし、顔料をすりつぶし、より精選された粉末を得ることを目的とした行為が推定されている（註4）ことからすれば、本遺跡の場合も、磨石と大型礫（台石）を利用した顔料の精選作業が、住居屋内で行われたことを可能性として指摘できる点で興味深い。

(註1) 長谷川孟他「大倉遺跡」「牧野遺跡・大倉遺跡・大堀I遺跡」上野原町教育委員会 1980

(註2) 帝京大学山梨文化財研究所保存科学研究室の鈴木稔氏に分析していただいた。

(註3) この大型礫は、在地の小仏山系に由来する片状の泥岩で、表面が層状に剥がれやすい性質をもつ。

(註4) 安達厚三「石皿」「縄文文化の研究7」 1983

長野県立歴史館開館記念企画展図録『赤い土器のクニ』長野県埋蔵文化財センター 1994

図 版

図版 1



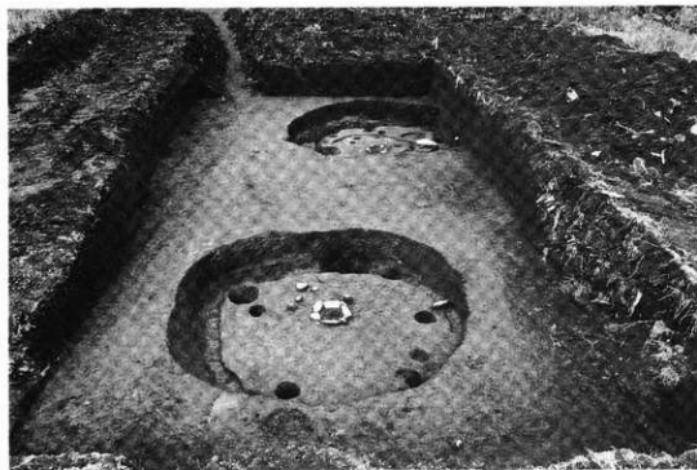
調査地遠景



調査地近景

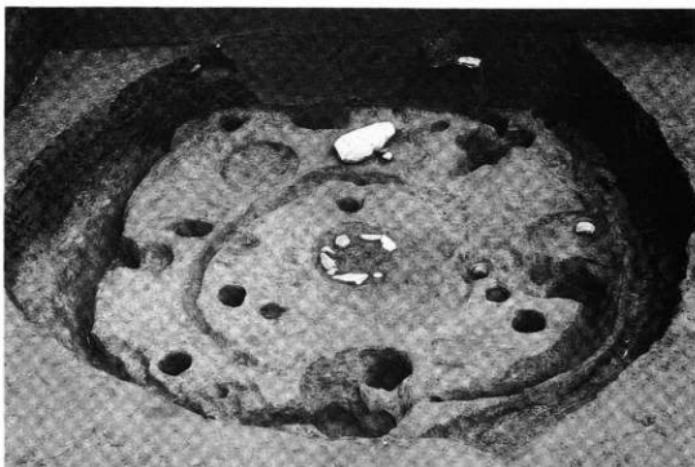


調査風景

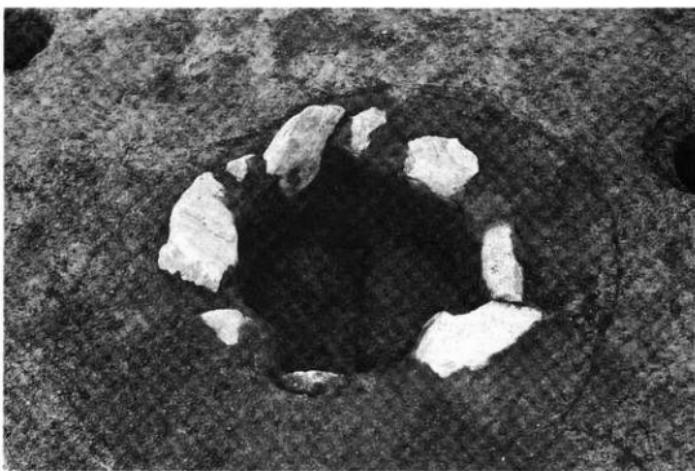


調査区全景

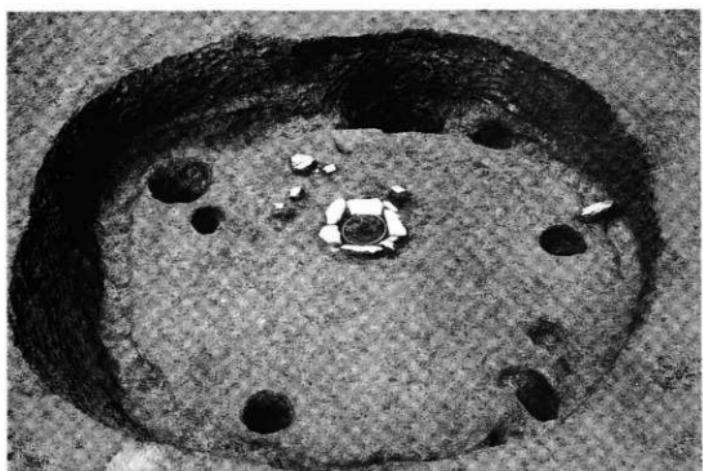
図版 3



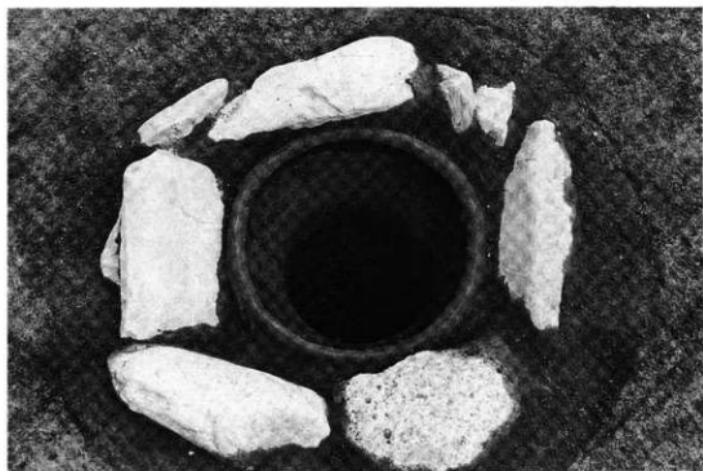
1号住居址



1号住居址 炉

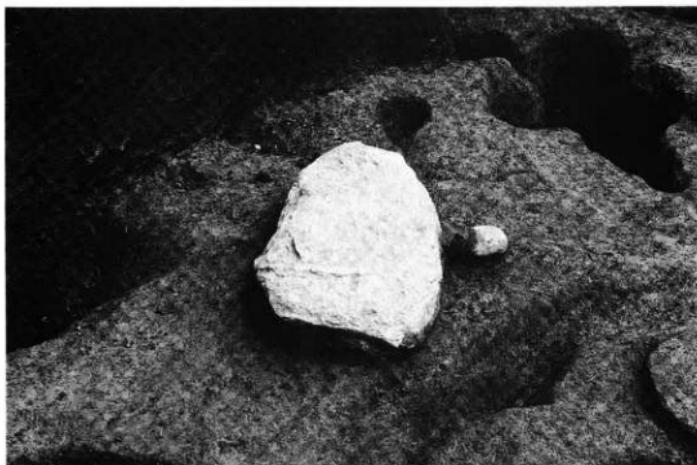


2号住居址

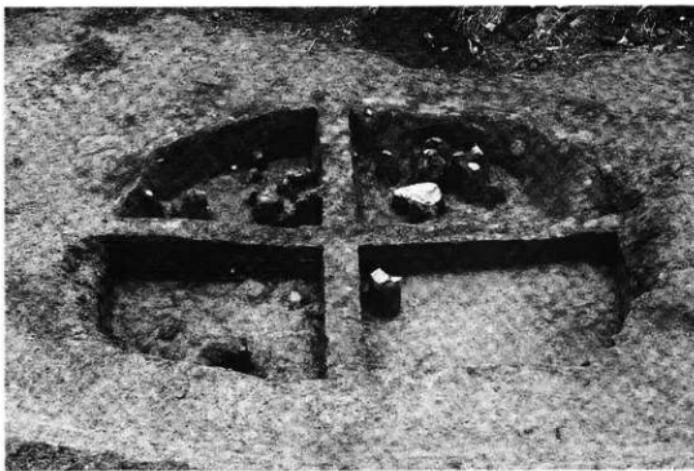


2号住居址 炉

図版 5



1号住居址 大型砾と赤色顔料付着磨石

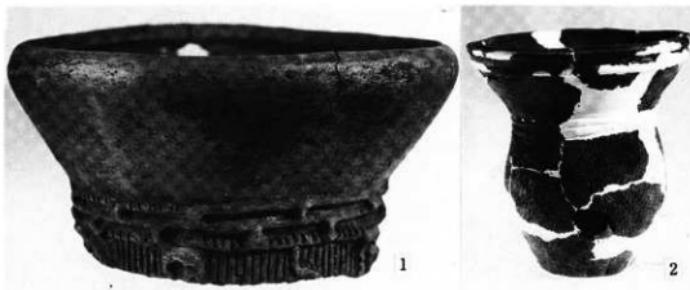


2号住居址 遺物出土状況

図版 6

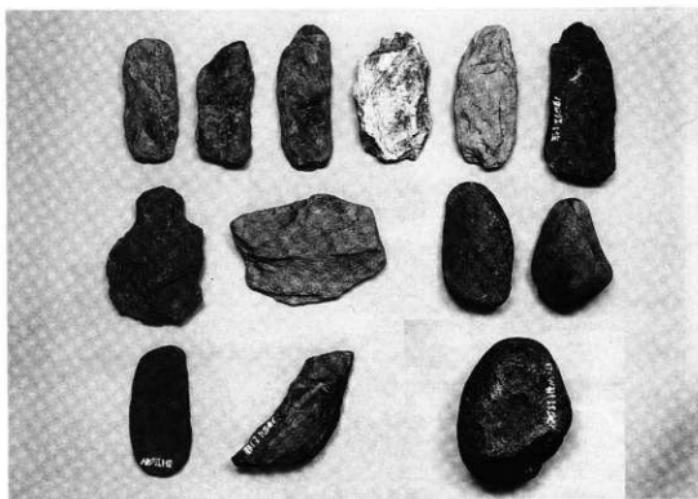


1号住居址出土土器

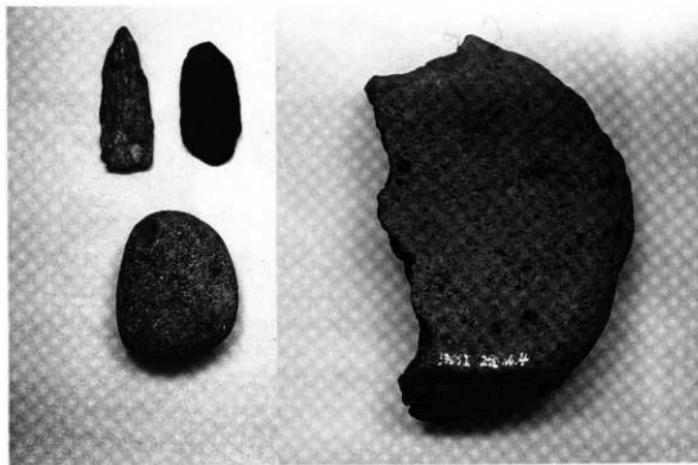


2号住居址出土土器

図版 7



1号住居址出土石器



2号住居址出土石器

報告書概要

フリガナ	ノタジリ I イセキ	
書名	野田尻 I 遺跡	
副題	民間宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	
シリーズ	上野原町埋蔵文化財調査報告書 第7集	
著者名	小西直樹	
発行者	上野原町教育委員会	
編集機関	上野原町教育委員会	
住所・電話	〒409-0112 山梨県北都留郡上野原町上野原3504-1 TEL0554-62-3111	
印刷所	サンニチ印刷	
発行日	平成10年(1998)3月31日	
野田尻 I 遺跡	所在地	山梨県北都留郡上野原町野田尻378番地他
	25000分の1 地図名・位置・標高	上野原 北緯35°37'50" 東経139°04'00" 標高350m
概要	主な時代	縄文時代中期
	主な遺構	竪穴住居址2軒
	主な遺物	縄文式土器・石器
	特殊な遺構	なし
	特殊な遺物	なし
調査期間		
平成7年(1995)6月5日~6月25日		

上野原町埋蔵文化財調査報告書 第7集

野田尻 I 遺跡

平成10年(1998)3月31日発行

編集・発行 上野原町教育委員会

山梨県北都留郡上野原町上野原3504-1

TEL 0554-62-3111

印刷 サンニチ印刷

